

医学部附属病院第三内科よりご協力いただき GIF を施行し、以下の知見を得た。

1. 重複癌が 8 例、食道異型上皮が 4 例、Barret 上皮が 3 例、萎縮性胃炎が 30 例、腸上皮化生が 9 例に認められ、一般集団における検診での検出率に比し、高率であった。また活動期の潰瘍病変が 4 例に認められた。
2. 扁平上皮癌の発生部位、進展度と上部消化管病変の有無に関連性は認められなかった。
3. 飲酒・喫煙の両方を常用する者は、食道病変有病率が有意に高かった。

以上より、顎口腔領域の癌患者に GIF を行うことは、悪性病変のみでなく、前癌病変の発見や患者管理の面からも重要であることが明らかとなった。

4 外科療法を行った舌扁平上皮がんの治療成績

新垣 晋・中里 隆之・高田 佳之
小林 正治・鈴木 一郎・斎藤 力
勝良 剛詞*・林 孝文*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔生命科学専攻組織再建口腔外
科学分野
同 顎顔面放射線学分野*

外科療法を行った舌扁平上皮がんの治療成績を検討した。

対象は過去 12 年間に外科療法を行った舌扁平上皮がん 70 例である。TNM 分類では T1 30 例、T2 26 例、T3 8 例、T4 6 例、N0 53 例、N1-2 17 例、全例が M0 であった。舌部分切除術が 51 例、舌半側切除術が 19 例、頸部郭清術は 35 例（後発転移 14 例を含む）に行われていた。皮弁を用いた再建術は 21 例に行われていた。

70 例の 5 年生存率は 78 %、T 別では T1 87 %、T2 75 %、T3 87 %、T4 33 % であった。リンパ節転移の有無による 5 年生存率はそれぞれ 58 %、94 % であった。再発は 33 例に認められ、原発 5 例、頸部 23 例（後発転移 15 例を含む）、遠隔転移 5 例であった。頸部再発 23 例のなかで 5 例に舌リンパ節転移が認められその治療に苦慮した。

舌がんの予後因子であるリンパ節転移のなかで舌リンパ節転移はその治療が困難なため早期の確定診断が重要である。

5 系統的前立腺多ヶ所生検の検討

糸井 俊之・山名 一寿・若月 俊二
谷川 俊貴・西山 勉・高橋 公太
新潟大学腎泌尿器病態学分野

【目的】Hodge らの系統的 6ヶ所生検が標準的であったが、最近さらに多くの multicore biopsy が推奨されるようになってきた。我々も 2001 年 6 月より 14ヶ所生検を施行している。今回従来の 6ヶ所および両側 transitional zone の計 8ヶ所と、さらに左右 peripheral zone 内側 3ヶ所ずつ追加した計 14ヶ所生検症例とを比較検討した。

【対象と方法】対象は 2000 年 1 月より 2003 年 2 月までに当科で経直腸的エコー下生検を受けた 216 例（8ヶ所生検 108 例、14ヶ所生検 108 例）である。

【結果】Gray zone (PSA4-10ng/ml) 症例において 8ヶ所、14ヶ所生検の癌検出率はそれぞれ 6/53 (11.1 %)、18/62 (29.0 %) であり有意に 14ヶ所生検の方が優れていた ($p = 0.0175$)。

【結論】Gray zone の症例において 14ヶ所生検は癌検出率の向上に有用である。

6 年代に伴う肺癌手術成績の改善

吉谷 克雄・小池 輝明・大和 靖
佐藤 衆一

新潟県立がんセンター新潟病院呼吸器外科

【目的】原発性肺癌の年代別術後生存率を比較し、成績向上の原因を検討した。

【対象と方法】非小細胞肺癌の完全切除例について 1970 ~ '79 年 (186 例)、1980 ~ '89 年 (630 例)、1990 ~ '99 年 (1233 例) の計 2049 例を対象とした。各 stage 症例の比率 × 5 生率を生存寄与度 (Survival Index: SI) として使用。

【結果】1) 5 生率は 70 年代 41 %、80 年代 58 %、90 年代 63 % と有意に向上。2) SI の推移